

令和7年度 とうきょうすくわくプログラム 活動報告書

テーマ：園内の虫

1. テーマの設定理由

園内には樹木や花が多く、身近な場所に多様な昆虫が生息しており、子どもたちは日常的に「探す・観察する・捕獲する」活動を楽しんでいる。子どもたちが、自然により興味と関心を持ち、生き物を大切にすることを育めるように、子どもたちの身近に存在する園内の昆虫をテーマに設定した。

2. 活動実績の一覧

実施時期	活動内容
4月～12月	虫に関する絵本や図鑑を保育室の本棚に置き、子どもたちがいつでも読めるようにした。
	虫に関わる製作を行い、製作物で遊んだ。
	虫に関する絵本の読み聞かせを行った。
	園庭で虫を探して観察した。必要に応じて、観察道具や捕獲道具を使用した。
	活動のポスターを作成し、掲示した。
4月～12月	幼稚園隣接の畑で虫を探した。
4月～7月	チョウやダンゴムシ、(虫ではないが)カタツムリなどを飼育し、生態を観察した。
6月、7月	園で飼育されているカブトムシを触ったり、観察したりした。

3. 探究活動の実践

活動のために準備した素材・道具、環境設定

- 園内の樹木や花だけでなく、畑にも行く機会を設けた。
- 絵本や図鑑、タブレットを保育室に常備し、虫について興味が高まったタイミングでいつでも調べられる環境を整えた。絵本や図鑑については、幼稚園や畑、近所に生息する虫や生物を考慮して選択した。
- 活動の様子を記録するために写真を撮影し、また、子どもたちの興味が発生したタイミングですぐにインターネットで調べられるようにタブレットを準備した。
- 製作のための材料を準備した。
- 虫を観察するために観察道具や捕獲道具を準備した。

- 活動のポスターを作成するための材料や道具を準備した。

活動の内容

- 虫の絵本を見た。
- 色々な虫を園庭や園の畑で探して触ったり、観察したりした。
- チョウやダンゴムシ、(虫ではないが)カタツムリなどを飼育し、生態を観察した。
- 虫の製作をして遊んだ。
- 活動の様子をカメラで撮り、その写真を貼った掲示物を保育室に飾り活動を振り返った。
- 保育者がタブレットで虫の写真を撮り、その画像を拡大させながら子どもたちが観察した。
- 他のクラスの子どもたちも虫を観察できるように登園の時間に保育室前に虫かごを置いた。
- リトミックの中で虫の動きを真似て活動した。
- 虫の図鑑を本棚に置き、自由に読めるようにした。
- 畑に行き、虫探しを行うとトンボとバッタを見つけ、捕まえたり、観察したりした。
- 虫探しが好きなので、自分用の虫とり網と虫かごを製作した。
- 冬になり虫がいなくなってきたので、トンボを製作して虫探しごっこを行った。


活動中の子どもの姿と声、子どもの探究的な行動、子ども同士や保育者との関わり




- ダンゴムシの絵本を見ていた子に、保育者が「ダンゴムシどこにいるかねえ？」と訊ねると「探す！」と言い、周りにいた子も「ダンゴムシ探す！」と伝えてきたので、園庭や園の畑を探しに行った。虫を探す際、初めは保育者が地面の上に敷いてあるマットをめくったり、プランターの下を探したりしたが、その後は子どもたちが思い思いにマットをめくったり草の中を探したりするようになった。
- 園内の虫について活動していることを保護者に伝えたところ、家や公園にいた虫を捕まえ園に持参してくるようになった。チョウチョの幼虫を持参してくる子がいたのでクラスで飼育することになった。
- 朝、保育室の前に虫かごを置いておくと、他の学年の子どもたちがひよこ組に虫を観察しに来るようになった。ひよこ組の子どもたちが思いつかないような疑問が浮かび、幼虫に名前を付けようとしたり、どのくらいえさを食べたかを観察したり、どのくらい生きられるか等を考えたりするようになり他学年と一緒に楽しみながら観察した。
- 虫の図鑑を本棚に置き、様子を見るとすぐに図鑑を見つけ毎日眺めるようになった。その後、子どもたちから保育者に本の内容を伝えてくるようになった。
- 11月になり、預かり保育の部屋で飼育しているカタツムリが餌の野菜を食べなくなってきたことを疑問に思った年長児がひよこ組の保育者になぜなのかを尋ねに来た。タブレットを使用し、なぜ食べないかを子どもと保育者で調べカタツムリは冬眠する準備期間である

ことが分かり落ち葉を集めることにした。

- ピアノの音に合わせて動物になるリトミックを行っているときに、チョウチョ、ダンゴムシ、バッタ、トンボ、ミミズ等の動きをやりたいと子どもたちから提案してきたので虫の動きを子どもたちと保育者で考えながら動いて活動した。
- 粘土遊びをしている時に、小さな丸いものを作っている子がいたので保育者が何を作ったか聞くと「かたつむりの餌」と嬉しそうに答えた。
- チョウチョが羽化したので、保育者がチョウを腕に乗せ放した。その後、自分の腕に乗せてチョウを逃がしたいと伝えてきたので、子どもの腕に乗せて、自然に放すことにした。初めは怖くてやりたくないという子もいたが、段々と興味がわき自分もやってみたいと保育者に伝えてきて、クラスの子全員がチョウを放すことができた。
- 10月にサツマイモ掘りが終わった後の畑に行くと、たくさんのバッタがいた。数名の子が自分でバッタを捕まえた。ある子の手にはバッタを保育者が乗せるとバッタが手の甲でウンチをした。「バッタがウンチした〜」とその子が言うと周りの子が集まり、皆で楽しみながらそのバッタを観察した。その子は、12月になっても「バッタがウンチしたね〜」と保育者に伝えていて、記憶に残る活動となった。
- 11月に入り、気温が下がると今までいた虫たちは見られなくなった。なぜいなくなるのかを保育者がタブレットを使用し調べ、子どもたちに伝えた。その後12月に入り年長組の子が、ひよこ組に来てなぜ虫がいらないのかを保育者に聞きに来た。すると、ひよこ組の子が「寒くなると虫さんはお休みするのだよ。」と、答えていた。

【活動の写真】

	<h4>4月から5月の活動</h4> <ul style="list-style-type: none"> ● 沢山のダンゴムシを見つけて触ったり観察したりした。 ● ダンゴムシを製作して、ダンゴムシの動きを考えながら遊んだ。
---	---

	<p>6月7月の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ダンゴムシやカタツムリを発見し、虫かごで飼育することになった。エサは何を食べるのかを絵本やタブレットで調べた。 ● 保護者からチョウの幼虫を頂き、飼育した。 ● 幼虫を手のひらに乗せ、羽化した17匹のチョウを子どもたちの腕に乗せて、自然に放した。
	<p>9月10月の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 畑でトンボやバッタを見つけ、捕まえ方を他の職員に教えてもらい、捕まえた。その後、皆で観察した。 ● 虫の図鑑を保育室に置いたところ想像以上に人気があった。
	<p>11月12月の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 寒くなってきた中、虫はまだいるのかを園庭や畑で調査した。 ● 虫をあまり見かけなくなったため、子どもたちが製作した虫かごと虫とり網、トンボを使って、園内で虫探しごっこを行った。

4. 振り返りによって得た先生の気づき

- 数名の子が読んでいたダンゴムシの絵本から始まった虫についての活動だったが、様々な気づきがあった。
- 虫が苦手な子もクラスの半数位いたが、色々な虫を飼育したり観察したりしていくうちに触れるようになった。
- 他学年の子どもたちは、ひよこ組に行くと虫が観察できることが分かり、他学年の子どもたちとの関わりが増えた。そして、虫を捕まえる時の方法などを他の職員から教えてもらうことも多く、子どもたちは色々な人との関わりが増えたことで安心感を持ちながら活動できるようになった。
- 保護者からの協力もあり、虫を園に持参してきたことで活動の幅が広がった。また、活動の様子を定期的にポスターとして掲示したため、日ごろの子どもたちの様子を保護者に見てもらうことができた。
- 虫の活動を続けていく中で、園庭や畑に多く行き、周りの自然や季節に興味を持つようになった。
- 活動の中でタブレットを使用し始めた。疑問を分かり易く調べられるので様々な場面で活用することができ、子どもたちも保育者に色々な疑問を伝えてくるようになった結果、会話のきっかけが増え、学びが深まった。
- テーマを決めて活動をしてきたことで、1つのことを一緒に体験する時間が多くなり、子ども同士のかかわりが増え、仲が深まったように感じた。

5. 活動のポスター

とうきょうすくわくプログラム 2024

ひよこみ テマ「園内の虫」

〈テーマの決定理由〉 子ども達が自然への関心を高い生き物を大切にすることを育むため

4月5月

入園し、園の生活に少しずつ慣れていっただけに、子ども達はどうな遊びにワクワクするかな?と考えていると何人かの子がダンゴムシの絵本に夢中になっていました。保育者が「ダンゴムシを探してみようか?」と声をかけるとみんな大喜びでした。

6月

虫を探したり観察したりすることが日課になったひよこ組登園前に、お母さんとダンゴムシを見つけて園に持ってくるか?とおぼあちゃんのお家に行ったアゲハチョウの幼虫も持ってくるか?というようになりました。園の沢山の木の周りには沢山のカタツムリもいました。園の花壇の葉にはツマクロヒヨウモンの幼虫もいて皆で観察したり、触ったりしました。

11月2月

11月に入ると、段々と寒さを感じる日が多くなりました。すると、ジャングルハウスにいたダンゴムシや、チョウがいなくなり、畑でもトンボやバッタの姿が見られせん。虫が大好きになったひよこ組はちびり寂しそうでした。そこで、虫採りおみやぎや虫カゴ、トンボを子ども達が製作し、虫探しごっこ園内で行いました。

4月から沢山の虫との触れ合いで色々な体験をすることが出来ました。その中で、自然への関心が高まり楽しい時間を過ごせたようです。そして今回のすくわくの字で生き物を大切に育む気持ちが育つれら嬉しです。

9月10月

2学期に入ると、園庭ではセミの声は聞こえなくなりましたが、夏休みの間にセミを見つけたたり、セミの抜け殻をしてくれる子がいました。また、虫図鑑も本棚に用意しておく子ども達もすぐに気付く興味を持って毎日図鑑をみるようになりました。

季節が変わり、今まで園庭にいたダンゴムシ等はあまり見かけなくなりましたが、畑ではトンボやバッタがたくさん見えて子ども達は大喜びでした。

テーマ：朝顔の栽培

1. テーマの設定理由

幼稚園では、花壇や鉢に花を植えて育てている。「何の花が咲くかな？」とよく子どもたちが話しているところから、その興味と関心を深めていきたいと考えた。また、年少組は朝顔を一人一鉢で育てていくため、愛着が形成されやすく、観察が日常化することによって様々な発見があると予想される。朝顔は栽培が比較的簡易であるため、失敗しにくいのも理由である。

2. 活動実績の一覧

実施時期	活動内容
5月～9月	花に関する絵本や図鑑を保育室の本棚に置き、子どもたちがいつでも読めるようにした。
5月、6月	朝顔の種を自分の鉢に蒔いて、園庭で各自朝顔を栽培した。 しかし、6月中旬に病気が広がり、朝顔が栽培困難になったため、栽培を中止した。
6月～9月	朝顔の代わりにヒマワリの種を蒔いて、園庭で各自ヒマワリを栽培した。夏期休暇中は家に持ち帰り栽培した。
7月	朝顔に関わる製作を行った。
9月	ヒマワリの観察画を行った。
	鉢を掃除し、片付けた。

3. 探究活動の実践

活動のために準備した素材・道具、環境設定

- 朝顔、ヒマワリを栽培するために種と園芸用品を準備した。
- 製作のための材料を準備した。
- 子どもたちが毎日水やりをできるように水やりの道具を準備した。
- 日常的に観察できる場所に栽培環境を用意した。
- 夏期休暇中でも栽培し、興味を維持できるように朝顔日記を準備した。
- 活動の様子を記録するために写真を撮影し、また、子どもたちの興味が発生したタイミングですぐにインターネットで調べられるようにタブレットを準備した。
- 花に関する絵本や図鑑を保育室の本棚に置いて、子どもたちの興味に応じて各自自分で調べられる環境を作った。

活動の内容

- 朝顔の栽培：自分で種蒔きや支柱たて、水やりを行い、成長過程を観察した。

- 朝顔のリース作り：タブレットで朝顔の成長過程を視聴した後、花紙やコーヒーフィルターを使って朝顔のリース作りを行った。
- ヒマワリの栽培：自分で種蒔きや水やりを行い、成長過程を観察した。
- ヒマワリの観察画：ヒマワリを見ながら、画用紙にクレヨンでヒマワリの絵を描いた。

活動中の子どもの姿と声、子どもの探究的な行動、子ども同士や保育者との関わり

- 朝顔やヒマワリの栽培では、自分で水やりを行うことで「葉っぱでできたかな～?」「葉っぱが2枚になったよ!!」と成長過程に気づく子が多かった。子ども同士、「見て見て!大きくなったよ!!」と見せ合う姿も見られた。また、朝顔が病気になってしまった時には、「葉っぱが黒くなっている…どうしたのかな?」と子ども同士で話をしており、朝顔以外の葉も見て、葉の色の違いに気付く子がいた。
- 朝顔やヒマワリの観察を行うことで、園庭に咲いている花にも興味がわき、保育者に花の名前を聞いたり、一緒に図鑑で花を探したりする子が増えた。また、友達同士で、「幼稚園に咲いている花はどれでしょう!」とクイズを出し合う様子が見られるようになった。

活動の写真

	<p>朝顔栽培、観察</p>
---	----------------



朝顔のリース作り



ヒマワリの栽培、観察



4. 振り返りによって得た先生の気づき

- 園では毎年朝顔を育てており、今回その朝顔をテーマにして様々な活動に取り組んだことで、子どもたちは例年以上に朝顔に興味を持ちながら栽培していた。
- 子どもたちが自分で水やりを行うことで、より花を観察する機会が増え、朝顔やヒマワリ以外の他の花にも興味を持つことに繋がった。また、花を観察する習慣がついたことで、花に止まっていた虫にも興味が広がり、小さい虫でも見つける子が増えた。
- より子どもの花への興味を広げていくには、子どもへの発言を待つだけでなく、保育者からも何かしらのアクションが必要だと感じた。それによって出た子どもの発言を拾い、活動に繋げていくことで、より子どもの探究心が高まると思う。

テーマ：さつまいもの観察

1. テーマの設定理由

幼稚園では、隣接の畑を活用して子どもたちがサツマイモを収穫している。芋苗植えと収穫に関わる機会があるものの、栽培期間中の関わりが希薄になりやすい。日常的な観察と関連活動を増やし、興味と関心を継続させたい。

2. 活動実績の一覧

(写真を選ぶ対象の活動はハイライトされています。)

実施時期	活動内容
5月	幼稚園隣接の畑（以下、「畑」）にサツマイモの苗を植えた。
5月～10月	畑に行き、サツマイモの生育状況を観察した。
	畑で活動する前にサツマイモや作物に関わる絵本の読み聞かせを行った。
10月	畑でサツマイモを収穫した。
	保育室で、収穫したサツマイモの観察画を描いた。
	収穫したサツマイモでマフィンを作り、食べた。
	保育室の本棚に、サツマイモや焼き芋に関する絵本や図鑑などを置いた。
10月～2月	収穫後、サツマイモのツルをペットボトルで水耕栽培し、生育を観察した。水耕栽培一部を土に植え替えた。

3. 探究活動の実践

活動のために準備した素材・道具、環境設定

- サツマイモの苗を準備した。
- サツマイモに関わる絵本や図鑑などを保育室に置いた。
- 畑の管理担当職員にサツマイモの栽培環境の作成と管理を依頼した。
- サツマイモの観察画に必要な画材を準備した。
- サツマイモの料理に必要な調理器具と食材を準備した。
- 保育室でサツマイモの水耕栽培を行い、収穫後もサツマイモに日常的に接する環境を作った。
- 活動の様子を記録するために写真を撮影し、また、子どもたちの興味が発生したタイミングですぐにインターネットで調べられるようにタブレットを準備した。

活動の内容

【サツマイモの苗植え】

マルチで覆われた畑の畝で子どもたちが各自穴を掘り、サツマイモの苗を植えた。植える前にはサツマイモの生育に関する絵本を読み聞かせ、サツマイモがどのように成長していくのか子どもたちがイメージを持てるようにした。

【サツマイモの観察】

サツマイモの苗を植えてから定期的に幼稚園の畑に行って観察した。茎が伸びていることや葉が大きくなっていることに気が付いた。畑にはサツマイモ以外の植物や昆虫、クモがいることを発見し、触ったり捕まえたりする様子があった。

【サツマイモの収穫】

秋になると大きくなったサツマイモを収穫した。子どもたちは自分で掘ったサツマイモの大きさを自慢しつつ、大小、形、色などサツマイモにも個性があることに気付いた。サツマイモを掘りつくしたと言われても、まだあると信じて掘ってみたり、サツマイモ以外の畑の昆虫やクモを追っかけていたり、畑の中で様々な興味と楽しみ方を子どもたちは発見しているようであった。

収穫後、サツマイモを家でどうやって食べるのか話している子どものグループがいたため、帰りの活動中にクラス全体で話してみることにした。焼き芋、スイートポテト、天ぷらなど様々な料理が子どもたちから提案され、サツマイモの味に期待を寄せているようであった。次の朝に、保育者と子どもたちの間で、昨夜家で食べたかどうかの話が盛り上がった。

【サツマイモの観察画】

子どもたちは、収穫したサツマイモの塊根とツルを観察しながらクレヨンと絵の具を用いて観察画を描いた。じっくり観察する時間を設けたことで、収穫時には気が付かなかったツルにひげがたくさんついていることやサツマイモごとの違いを発見していた。また、事前に根菜に関する絵本を読み聞かせていたため、他の根菜との違いを発見する子どもがいた。

【サツマイモの調理】

収穫したサツマイモを使ってマフィンを作った。調理工程の中で、最初はサツマイモの香りはわかったが、バターなどを入れて調理することによって匂いに気付き、段々甘そうな匂いにかわっていくことに驚いていた。

【サツマイモの葉の観察】


観察画でも用いたサツマイモのツルをペットボトルの中に入れて成長の様子を観察した。ツル

の一部で根がなくとも、水の中で少しずつ根が伸びてきたり、新しい葉っぱが生まれてきたりすることに気が付いた。途中から、1つの株を土の中に埋めて、水の中で育てたものと生育を比較した。水の中で育てたものは少しずつ葉の色が変わり、枯れていってしまったが、土の中で育てたものは現在も成長を続けていることを発見した。



活動中の子どもの姿と声、子どもの探究的な行動、子ども同士や保育者との関わり

- サツマイモの葉を観察している際に、保育者が「葉の形はどんな形？」と質問すると、「ハートみたいな形になっている」と答えている子がいた。後日観察画を描く時に、その子どもはハート型の葉を描いていて、サツマイモの葉の特徴を捉えていた。
- 収穫後にサツマイモのツルを水と土の中で比較しながら育てている時、「ペットボトルの中が根っこでいっぱいになっている」「小さい葉っぱが出てきたよ」などサツマイモが着実に成長していることに気が付いた。土で育てている方には「サツマイモが土の中にできるかな」と塊根ができることを期待している子がいた。子どもたちは、サツマイモは水中でも土の中でも育つことを認識しつつも、水中栽培はあまりうまくいっていないことから、畑のような環境がサツマイモにとって理想的で大きな芋ができると学んだようであった。

活動の写真

	<p>5月、畑にサツマイモの苗を植えた。サツマイモの成長を願う子どもがいた。</p>
---	--

	<p>苗を植えてから、定期的に畑にサツマイモの観察に行った。茎が伸びていることや、葉が大きくなり、枚数も増えていることに気が付いた。葉の近くにいる虫にも興味を持ち観察していた。</p>
	<p>10月、サツマイモを収穫した。サツマイモがたくさん収穫できることや、大きい塊根があることに気が付いた。収穫物を持ち帰って、どんな風に調理してもらおうか友達と話す様子が見られた。</p>
	<p>10月、収穫したサツマイモを見ながら観察画を描いた。ツルにはひげが生えていることや、1本の茎から3つの塊根ができていることに驚いていた。</p>

	<p>10月、子どもたちが収穫したサツマイモを使ってサツマイモのマフィンを作った。作っている間にサツマイモの匂いをかいだり、完成後、おいしさについて友達と伝えあったりする様子が見られた。</p>
	<p>観察画を描いたのちに、ペットボトルの中にサツマイモのツルと葉を入れて様子を観察した。</p>

4. 振り返りによって得た先生の気づき

- 今年度サツマイモをテーマに設定して、観察などの活動の機会を増やしたり、子どもたちへの働きかけを意識的に行ったりすることで、例年より子どもたちの興味と関心が深まった。特に、観察する機会を増やすと子どもたちの発見が増え、その発見から興味と関心が広がった。
- 根菜とさつまのおいもの絵本やスイートポテトなどの料理の絵本を子どもたちが自分から選び読むようになった。友達と貸し借りしながら読み合ったりしていた。
- サツマイモに関わる活動をきっかけに、サツマイモや根菜の絵本やスイートポテトなどの料理の絵本を子どもたちが自ら選び読むようになった。
- 子どもたちが物事に興味を持つためには、ただ活動を実施するのではなく、目的を意識しながら子どもたちに疑問を投げかけたり、一緒に調べようとしたりすることが必要だと感じた。また、写真撮影と調査の重要性に気付かされた。撮影することで、子どもたちや他の保育者と視覚的に共有できる記録を作ることができる。過去の活動を振り返ったり、子どもたちが自身の姿を客観的に見られたりする。調査をすることで、事前にその分野の知識を蓄えるだけでなく、子どもたちがどういったことに興味と関心を持ちやすそうで、どういう方向でさらに活動を展開させられるか予想できるようになった。

テーマ：ミニトマトの観察

1. テーマの設定理由

幼稚園では、年長組が毎年ミニトマトを栽培している。今年度はハート形の実がなる品種を選ぶ予定で、子どもたちの関心が高い。子どもたちは一人一鉢で栽培するため愛着が形成されやすく、強い興味と関心を持つようになり、様々な発見につながると考えている。

2. 活動実績の一覧

実施時期	活動内容
4月～9月	ミニトマトの苗を子どもたち各自の鉢に植え、幼稚園隣接の畑（以下、「畑」）で栽培した。
5月	虫眼鏡を使用してミニトマトの生育状況を観察した。
6月～8月	ミニトマトを収穫した。
	収穫数をトマト日記に記録した。
6月	ミニトマトの観察画を描いた。
7月	ミニトマトを使ってピザを作り、食べた。

3. 探究活動の実践

活動のために準備した素材・道具、環境設定

- ミニトマトの栽培道具を準備した。
- ミニトマトを観察するための観察道具を準備した。
- 収穫数を数えるためのトマト日記を準備した。
- 観察画に必要な画材を準備した。
- ミニトマトの料理に必要な調理器具と食材を準備した。
- 活動の様子を記録するために写真を撮影し、また、子どもたちの興味が発生したタイミングですぐにインターネットで調べられるようにタブレットを準備した。

活動の内容

【ミニトマトの観察】

虫眼鏡を使って、ミニトマトを観察したり、実際に触れてみたりした。ミニトマトの観察をしたことで、他の植物にも興味を持ち、虫眼鏡を使って様々な植物を観察する姿が見られた。

【ミニトマトの収穫、調理】

自分たちで育てて収穫したミニトマトを使って、ピザ作りをした。ミニトマトを半分に切った際に、中に種がいっぱいあることに興味を持つ子がいた。また、焼きあがったピザを食べて、

焼いたミニトマトと生のミニトマトの味の違いに気がつく様子があった。そのことを聞いて、どんな味になるか考えていた。

活動中の子どもの姿と声、子どもの探究的な行動、子ども同士や保育者との関わり

- ミニトマトを虫眼鏡で観察し、「茎や葉に白い毛が生えている」と気がつき、実際に触ってみて「少しチクチクする」と言っていた。その性質に気付いた子どもは他の植物はどうなっているのかと興味を持ち、畑の他の植物を観察し始めた。他の植物に興味を持ち観察することで、他の植物とミニトマトの差に気付き、改めてミニトマトの特徴を実感としてとらえられるようになった。
- 観察の途中、ある子どもが「あ！」と何か発見して他の子どもたちがそこに集まったり、「これ見て！」と他の子どもを誘ったりすることで、畑の様々な発見が子どもたちの間で共有され、全体としてのたくさんの発見につながった。
- 収穫したミニトマトでピザ作りをした時、焼きあがったピザを食べて「焼いてあたたかくなったミニトマトは生のミニトマトと味が違う」と味の違いを感じる子がいた。保育者がどういう風に違うか聞くと、「焼いたミニトマトの方が甘く感じる」と言った。子どもたちは、自分が関わってきて強く興味を持ったミニトマトだからこそ、味の違いを認識したのではないかと考える。

活動の写真



虫眼鏡を使って観察した。



友達と一緒に赤くなっているミニトマトを探し、収穫を楽しんだ。



ミニトマトを細部までよく観察しながら、観察画を描いた。



自分達で収穫したミニトマトを包丁で切り、中身がどうなっているか観察した。またミニトマトを使って、ピザを作った。

4. 振り返りによって得た先生の気づき

- 毎年年長組がミニトマトを育てている中、今年度はすくわくプログラムのテーマに設定したことで、例年よりミニトマト関連の活動の目的意識が高まった結果、子どもたちへの働きかけがより適切になり、活動の質が高まった。子どもたちはより興味関心を持ちながらミニトマトを育てることができ、より良い学びに繋がった。
- 虫眼鏡を使用した観察を行ったことで、普通に観察しているだけでは見えていなかった細かい部分が見え、子ども達にとって新たな気づきになった。ミニトマトの観察をしたことから、他の植物にも興味を持ち、子ども達自ら虫眼鏡で観察したり、実際に触れてみたりすることに繋がった。また、虫眼鏡は、倍率の問題で幼児には扱いにくいものの、手に持

つことで何かを観察、発見しようという意識を作ることが出来た。

- 自分たちで育てた食材を料理に使い食べる経験を通して、食材を含め食全般への興味・関心が高まったと感じた。前述の生と調理されたミニトマトの味の差についても、子どもたち自身が関わり強い興味があったからこそ、気付けた違いかもしれない。
- 子どもたちの探究心や興味を広げていくには、ただ活動を行うだけでなく、子どもたちの反応を見たり、発言をよく聞いたりしながら、活動を展開していく必要があると感じた。また、子どもたちが疑問に思ったことなどを一緒に共有して、調べたり実験したりしながら学んでいくことも必要だと思った。